

保育場面における子供同士の関わりの一考察

～手洗い場でのやりとりを通して～

岡本 満江 古相 正美

A Consideration About the Relationships Between Children in Childcare Centers -Through Communication at the Handwash Stand-

Mitsue Okamoto

Masami Furuso

I. はじめに

平成30年度から施行された幼稚園教育要領（注1）では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10の姿が明確に記されている。その中には「協同性」や「社会生活との関わり」「言葉による伝え合い」と、人との関わりつまり領域「人間関係」が重要視されているものが多い。筆者が幼稚園教諭を続けてきた中で、大勢の前で活発に喜んで話をするができる子供もいれば、友達との関わりが苦手遊びの中に入っていけない子供や、困っていても自分から相手に伝えることが難しいといった様々な子供達の姿を目にしてきた。人間関係を構築する基盤には言葉のやりとりが交わされる。そこで今回は子供達の「言葉による伝え合い」つまり「言葉」に着目する。

現行の幼稚園教育要領「言葉」は、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とされている。また、ねらいの一つは「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう」である。伝え合う相手は、家庭に戻れば家族や地域の方が想定される。また、1日の多くの時間を過ごす幼稚園では、保育者や友達になる。では、その保育者や友達とどのような関わりを持っているだろうか。

筆者が幼稚園教諭として働いていた時、一斉保育の時は子供と保育者が同じ方向に向かっているのが比較何をしているのか把握しやすい環境だが、自由遊びや活動の合間の時は子供達同士の関わりが見えにくくなりがちなのが気にかかっていた。子供達の中には大人が存在が分かるとう気に表現の仕方を変えてしまう子供もいる。その行動自体は周囲への状況の判断・適応能力の発達と捉えられるのだが、子供達だけの世界ではどのようなことが行われているのだろうか。

日常保育の保育者が介在しない場所で子供達同士の関わりや、やりとりが行われている所を取り出してみると様々な場所があるが、特に食事後の手洗い場は盲点になりがちだと感じる。保育者は食事後、保育室内の掃除・まだ食べている子供への援助・その次の活動への言葉かけ・環境を整えるなどしなければいけない事があり、子供達が手洗い場で歯磨きをしている時は、子供達に任せてしまっていることが多い。そこで今回は食事後の手洗い場に注目し、子供達同士の言葉を中心としたやりとりを考察していくことにした。

II. 先行研究

保育場面における幼児同士の言葉のやりとりに関する先行研究は数多い。そのうちの一部をあげると、青井倫子「仲間入り場面における幼児の集団調節-「みんないっしょに仲よく遊ぶ」という規範のもとで-」（注2）は年長児がどのように遊び集団を調節しているのかを仲間入りの場面から明らかにしていったものである。保育者が無意識に促している「入れて」「いいよ」のルーティン化を指摘し、一緒に遊びたい子の仲間入りでは会話を反復したり仲間入り児の非統一的な表現もうまく遊びに取り入れたりするが、一緒に遊びたくない子に対しては、会話に入れないようにしその場から外れてしまう傾向があると述べている。砂上史子・無藤隆「子どもの仲間関係と身体性-仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること-」（注3）は言葉ではないが、非言語を用いて子供が他者と同じ動きをすることと仲間関係との関連を述べたものである。他者と同じ動きをすることが仲間としての関わりにおいて重要な役割を果たしているという。白井純子ほか「幼児の「聞き返し」-縦断的事例研究-」（注4）は「聞き返し」は周囲との相互作用を能動的に求めていることから、新しい語の獲得や理解につながっていくという。

また、外山紀子「幼稚園の食事場面における子どもたちのやりとり—社会的意味の検討—」(注5)は幼稚園の4・5歳児クラスの食事場面においてのやりとりを問題としている。幼稚園の4・5歳児クラスの食事場面では年齢が高くなるほど食に関連しない一般的なやりとりが多くなり「…あるひと、て—あげて—」「は—い」というルーティンはやりとりへの参加を容易にする場合があるという。小坂美鶴「3歳児の仲間同士の会話特徴について：言語使用と発話機能の分析からの検討」(注6)では、3歳児のごっこ遊びの中で「発話」と「非言語行動」の併用が多かったが、発話が少なく曖昧な伝達意図を持つ非言語行動で相互交渉が多くターンの維持が難しい。山本弥栄子「子ども同士の言語的コミュニケーションにおける一考察—会話の自然発生的過程の検討—」(注7)は、2歳後半頃から4歳台までを対象とした幼児間における会話の自然発生過程を質的に分析したもので、両者が眼前の事物を介さずに同じイメージを共有することができ、同じ経験をしていない相手に対しても会話が成立し始めるのは4歳児後半の幼児同士。また会話の中にも過去の経験の語りなど時間的文脈における発話解釈能力が獲得されるようになるという。淀川裕美「2-3歳児における言葉を用いた三者間対話の成立要因の検討—第三者の発話と被参加者の応答に着目して—」(注8)は、2・3歳の特性を踏まえ保育所で言葉を用いた対話が多く行われるようになる時期に焦点をあてている。二者間対話に第三者が発話し参入した場面で、第三者が被参加者と同じ話題について話す場合は言葉を用いた応答がされやすく、第三者が新たな話題について話す場合は言葉を用いた応答がされにくいことが報告されている。

そして、食事場面における幼児の会話を問題にした富岡麻由子「幼稚園の食事場面における幼児の会話の発達」(注9)では、3歳児はその場にあるものを話題に会話が進められていくのに対して、4歳児は幼稚園内の経験についての会話が早い傾向にある。また3歳児と4歳児の間で会話・言語的な発達が顕著に現れていることがわかったと述べている。砂上史子「幼稚園の葛藤場面における子どもの相互行為—子どもが他者と同じ発話をすることに注目して—」(注10)は、葛藤場面での子供が「他者と同じ発話をする」とは仲間か仲間ではないかの境界線をつくっており、遊びと葛藤の境界は相互行為を通して揺れ動くという。淀川裕美「2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化—確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して—」(注11)では、前期には抽象的な話題について対話を行うことが多いのに対して、中期・後期になると、より具体的で全員が共有している目の前のものを話題に

していることが多いと述べている。話題だけでなく話題への評価も共有し、他児とは違う自分の意見を述べるようになり、より多くの人数と対話できるようになる。この年齢は本来自己中心性が強く、平行遊びが多いとされる年齢だが、食事場面に関してはより多くの他児との対話を楽しみながら自分の意見を伝え合うことが示唆されている。続いて、淀川裕美「2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化—伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して—」(注12)は、前述論文と同様の場面で、前期は他児の発話に対し情報を追加することで応答し対話に参入、中期は一人が次々と話題を展開し他児が同意・反論・情報の追加等色々な形で対話に参加し複数名で対話を楽しむ傾向がある。後期は他児の発話に関連づけて自分なりの新たな情報を追加し、関連する話題に展開するなど、他児と折り合いをつけながら対話しているという。藤塚岳子「幼児期における会話の特徴と対人関係の発達過程—幼児園年長児の自発的活動場面を通して—」(注13)は、5歳児の自由な遊び場面における会話を収集している。新しい集団に慣れるまでまた仲間関係が成立するまでは、相手と向き合っても言葉による会話は簡単な独り言が多いが、仲間関係が成立すると徐々に減っていく。5・6歳児になると会話の中で相手が理解していないことがわかったと言ひ換えたり、確認したりすることが明らかにされた。

これらをまとめると、子供達は言語や非言語など様々なコミュニケーション手段を使用して子供同士の関わりを築いていくことがわかる。次第に仲間関係が構築されてくると、その場に適した言葉や方法を使って遊びを展開していく。つまり、言葉と仲間関係には相互作用が働いているのである。子供同士のやりとりがなされるようになる年齢を、4歳児後半という見解があると思えば、3歳児から可能、2・3歳児でもやりとりは可能だと述べているものもある。月齢や育ってきた環境、幼稚園と保育園などの就学前施設による影響も考える必要がある。多くの子供達が集団活動を初めて行う幼稚園と、乳幼児期から在園している保育園では子供同士による言葉のやりとりは異なることが予想される。

そこで、本論では幼稚園の3歳児の子供達を対象に、どの程度子供達同士でのやりとりが交わされているのかについて手洗い場面という事例を通して考察していく。

Ⅲ. 方 法

対象 福岡県の私立幼稚園

A幼稚園3歳児クラス(男児11名、女子9名、計20名 ※一時お預かりの男児を含めると計21名。保育者は女性教諭1名)を対象として行った。

期間 A幼稚園 2016年4月～12月まで週1回程度で観察。

方法 昼食後、手洗い場で歯磨き中に行われているやりとりを抽出。そこで得られた事例を子供の背景も含めて分析と考察を行った。記録はHDビデオにより撮影をした。A幼稚園では子供達のありのままの姿を捉えたいと考え、観察者は保育中に子供達と遊んだり話しをしたりしながら参与観察を行った。

※A幼稚園の手洗い場は保育室の一角に設置されており、食事を済ませた子供から歯磨きをしていく。

IV. 結果と考察

今回保育者が介在しない場所での対話を対象としている。よって基本的には手洗い場に定点カメラを設置して発話や行為を逐語録化し確認をした。A幼稚園に関しては保育室内に手洗い場が設置されているので、歯磨き中に子供達同士の対話が行われた際に子供達の妨げにならないよう随時メモを取った。事例に登場する子供の名前は全て仮名である。今回は村田孝次の考えを基に、全ての会話を含めた「話し合い」を「対話」と呼ぶことにする。(注14) また抽出した事例数は大量になるため、その一部を以下に掲載する。

事例1 2016. 9. 6

Aが手洗い場にいるとBが登場。2人は隣同士で歯磨きをするが、全く対話はない。歯磨きを始めて20秒程たってBがAの方を向いて「ニコッ」と微笑む。その後また話をせず歯磨きをする。

〈考察〉

Bは入園当初、泣きながら登園していたが、次第に好きな遊びを見つけ、安定した幼稚園生活を送れるようになっていた。他者との関わりにおいては、相手の話の内容を理解できていても、自分から相手に話しかけようとしない。事例では隣同士で歯磨きをしている動作を互いにチラッと見ていた。意識はしているものの、言葉では表現しない。しばらくしてお互いに目が合い、そこで「ニコッ」と微笑んでいる。親しみをもつまではいかないが、言葉にはならない非言語でお互いの存在を認めている。

事例2 2016. 9. 15

Aは歯磨きに来たCに自分のコップで優しく2回頭を叩いた。CはAの方を見たら微笑んでいたため、Cも微笑み返す。Cは自分の目の前の蛇口が開いている

のにもかかわらず、Aがいる蛇口から水をもらい歯磨きを始める。Aは歯磨きを終え、背伸びをしてコップに溜まった水を自分の頭よりも高い位置から流して去っていった。その様子をCも見て微笑み、同じように水を流して去っていった。

〈考察〉

CはAから頭を叩かれAを見るまでは驚きや疑問・怒りの心情であったことだろう。しかし、Aは軽くではあるが叩くことがボディタッチの一種でありコミュニケーションのひとつとして捉えている。CはAの顔を見ると優しく微笑んでいたことから自分の考えと異なった相手の存在に気が付き次の瞬間にCも微笑みを返し相手を受け入れている。人との関わりを通して言葉は獲得されていくのだが、この年齢の子供達だけの場面では非言語での関わりが多く生まれていることが事例からわかる。Cはクラスで自分をうまく表現できなかったためAの行為が嬉しかったに違いない。言葉で表現していないが、CはAの蛇口から水をもらうことでAと関わりたいと表現している。その後も同じ行動をする背景には、砂上史子・無藤隆「子どもの仲間関係と身体性－仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること－」(注3)でも言われているように、他者と同じ動きをすることで仲間意識に重要な役割を果たしていることがわかる。

事例3 2016. 9. 29

Dは手洗い場に来て歯磨きをするのではなく、コップに水を溜め蛇口に結ばれている石鹸をコップの中に沈めている。それを横目でみていたEは真似をする。FがE達の行為に「すごい」と言うとDは「これはEがやったんだよ」と言い返した。それに対してEも聞き取りは不能だが、自分の行動をFに言っている様子である。Fはその後、E達と同じようにコップの中に水を溜め、その中に石鹸を入れてみた。Fは石鹸が混ざっているコップに歯ブラシを入れ、歯を磨こうとしたがやめ、コップの水を流し始めた。同時に保育者が来てその行動を注意され、皆コップを洗い始めた。

〈考察〉

この事例でも同じ行動を真似することで仲間として認められている。よって最初Dから始まった行為がEへ、さらにはFへと伝わり言葉では交わされなかったが、仲間として共有した時間を過ごしていると言える。また、富岡麻由子「幼稚園の食事場面における幼児の会話の発達」(注9)の通り、話題が目の前の事物であると共通イメージすることができ、対話が成立している。『子どもとつくる保育』でも3歳児は「何でも出来てすごいで

しょ」と自慢気な態度でいたり、「すごい」と思ってくれる人がいたほうが楽しくなり、次第にその友達と一緒にいたいという気持ちが芽生えてくる(注15)と述べている。EもFから「すごい」と言われ自分の行動に自信を持っている。このように他者から認められて自己有能感が高くなることが3歳児の特徴の一つといえる。様々な体験の積み重ねによって子供達は思いを他者に伝えたい。その結果豊かな人間関係を築いていき、安心して話ができる環境が整っていくと考える。

事例4 2016.10.11

手洗い場にD・Gの順番でやって来る。Gは「2番」と言う。するとDが「違うよ。Eが1番で2番がH。3番がDで4番がG」と順番を言う。Gは「3番か、2番しかブー」というが、Dは自分が3番であることを主張する。DはGに「終わった?」と確認した。同時に部屋の中でハプニングが起これ、2人はその様子を見に行く。その後、先にDが手洗い場に戻り歯磨きをし直す。そこにBも戻るが、Dから「もう終わったんでしょ。終わったんなら早く行きなさい」とGは自分のコップを渡される。しかしGはコップを受け取らず、言葉も発しない。DはGの顔を見てもう一度「終わった?」と聞き、Gのコップに水を入れようとする。するとGは「終わった」といってコップをDから取る。Dは「だから(コップを)おしなさい(片付ける)」と言いながらGの背中を押している。するとGは歯磨きの場所を移動して「終わらない」と言い、もう一度歯磨きをやり直す。Dは「ん?」と口にしたが、それからは話をせずにお互い去っていった。

〈考察〉

Gは何でも早く行動したい性格から自分の順番を気にしていた。GはDが自分より先に手洗い場に来ていることはわかっていたので、Dが1番で自分は2番だと思いい言葉に発した。しかし、Dは自分より前に来て歯磨きに来た友達のことを説明したので、2人のやりとりはかみ合わない。Gはもう一度順番のことを言ってみたが、Dから再度違うことを指摘されたので、うがいをして話を強制的に終了させたと推測できる。一方DはGがうがいをしたので歯磨きが終了したと思いGに確認している。同時に保育室内でハプニングが起これ、2人の興味は違う方向に向かった。その後Dはハプニングの前にGがうがいをしていた事実を覚えていたので勝手に歯磨きが終了したと思いつ込んでいた。一方Gの中では終わっていなかったのだ。Dから「終わったんでしょ」と言われ、コップを渡されるという行動をとられ仕方なくなったGは拒否の態度としてコップを受け取らず、何も発しないとい

う行動をとる。これはGがDに対して口では勝てないと思ったのか、何か話したい気持ちはあっても自分の思いを言葉で表現しにくいのが3歳児らしいところでもある。その姿を見てDは終わってなかったのだと思い、コップに水を入れてあげようとするがGはコップを取り返している。Dは親切心からとった行動であるが、Gからしてみるとその行動が嫌なのである。Gはそのことには気付いておらず、終わったのなら早く片付けなさいと言葉を発している。Gは「終わらない」と言い、ここで始めて自分の思いを言葉で表現して別の場所に移動し歯磨きをしている。小声ではあったが自分の思いを伝えられたことが、自信になり次の行動に繋がったと考える。GにとってはDからコップを取ったことが、Dに対しての抵抗であり自分の表現なのである。幼児期の言葉の発達は個人差が大きいことから、保育者が介入しない場所ではうまく言葉に表現できない子供は態度や動作で表すことが多いことが示された。

事例5 2016.11.10

AとIは歯磨きをしている。2人の中には会話は無いが、お互いに目を合わせ、笑いながらうがいを何度も行っている。そこへトイレから戻ってきたDが手を洗いに来た。Dは自分がクラスにいなかったのはなぜかを質問している。Iは水を口に含んだまま答えているが実際には聞こえない。一方Aは「うんちをしていたから」と言葉で返答しAとやりとりが続く。Dは「正解」と言い、Aも喜びを表現した。その後Dはなぜ自分がトイレにいったのがわかったのか聞くと、Aは「(クラスの)ドアが開いたから」と返答する。Dは「最初おしっこって言った」と言い、Aは「ん?」と聞き直した。Dは「おしっこって思った。でも遅かったからうんちと思ったでしょ?」と質問しAは「うん」と返答した。Dはもう一度、うんちに時間がかかったことをAに伝えると、Aは「うーわー」と大袈裟に言い、Dは「じゃあね」と言ってその場を去った。その間Iはうがいに夢中であった。

〈考察〉

AとIはうがいをしながら笑い合うという同じ行動をして面白さを共有している。その途中でDは自分の行動を相手に質問することで自分に注目してほしいのだらう。Aが言葉で返事をしたことからAとの対話が成立する。やりとりが続いたのは話題の対象が「トイレ」であり、お互いにイメージしやすい内容だったからだと考えられる。また質問を聞き直すというのは、相手や内容に興味があることであり、関係がまた一歩深くなったと推察する。DはAが理解しなかったことを察知すると確認を

含めた言葉で表現している。Iはこの日は2人のやりとりが気になりながらも、自分の興味あること（うがい）に集中する。それが3歳児らしい一面でもあり、このような時間を過ごすことで次への意欲に繋がっていく。

IV. 全体考察

事例から対話が形式として成立しているのか分類していく。

- ①非言語…事例1, 事例2
- ②一方的な対話…事例4
- ③対話成立…事例3, 事例5

上記より3歳児は非言語でやりとりも多くされていた。まず、友達の存在に気付き、友達に近づき話しかけるという段階を経て対話成立となる。特徴としては次の点が挙げられる。

①友達の存在に気がつく

入園当初の不安や緊張から解放された子供達は、自分自身の事だけでなく、周りの子供達にも目を向けられるようになっていった。手洗い場で隣や近くにいる友達の様子を見ている。

②友達に近づく

友達の存在に気付き、気になり始めた子供達は自ら友達に近づこうとする姿が見られるようになった。直接言葉を交わすことはなくても、相手の模倣をしたり微笑んだりして、人とつながる喜びを味わう姿が見られた。

③友達に話しかける

気になる友達が出来始めると、自ら言葉で話しかけるようになった。自分の関心のある子へ一方的に話しかけ始め、友達の動作に反応して対話が交わされることもあった。

これらの特徴より幼稚園における3歳児は、非言語でコミュニケーションを成立させていることがわかる。見つめあったり、微笑んだり非言語の中に友達に関わりたいという気持ちが表れ、相手が態度や言葉で返し、その後言葉として表出されるのである。3歳児同士では非言語で相手と対話することが多いことから、感覚的な情報を非言語で共有し、コミュニケーションが日常的に行われている。手洗い場で友達の模倣をする場面が多数見られたのは、砂上史子・無藤隆「子どもの仲間関係と身体性－仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること－」（注3）と一致している。また対話成立の内容は、目の前の事物でのやりとりが中心であった。目の前の事物でのやりとりは3歳児でも比較的対話が成立しやすい環境であることが示された。イメージしやすく共通認識できる事物が対話成立において重要である。イメージが共有されると自己主張がぶつかり合ったりすることもあ

るが、言葉でうまく表現ができない子供は態度や表現で折り合いをつける方法も学ぶのである。

本研究により、手洗い場には固有の対話の特徴が見られた。近年様々な保育場面の研究が行われているが、食事場面や片付け場面と違い、手洗い場は常に気の合う友達と一緒にいるわけではない。つまり、手洗い場で出会うタイミングは偶然性が高い。その際、気の合う友達には話しをかけやすいが、反対にまだ関係が構築されていない場合には、子供達は相手の様子をしっかり観察している姿が見られた。何かのきっかけで相手とやりとりが始まり対話されていく。手洗い場は子供達にとって歯を磨いたり、手を洗ったりとももちろん衛生的な場所でもあるが、一つの重要な保育環境である。それは手洗い場がコミュニケーションの場になっており、様々な人間関係が生まれているからだ。

村田孝次が「幼児期の話す力は、生活からくる直接経験に非常に大きく依存している」（注16）と述べているように、子供の言葉が生活経験に影響していることがわかる。子供自身が他者に伝えたいような体験をし、それを言葉で表現できた時、相手が同意してくれたり、応答してくれたりすることで、次も言葉で表現したいという意欲が高まってくるのである。

幼稚園は子供達にとって初めての集団生活であることが多い。子供達はそこで他者と出会い、自分の居場所を確保し安定した生活を過ごしていく。当然のことながら、子供達には個人差が大きい。保育者は、焦らずに一人一人の特性を把握し、温かな関わりとして子供達一人一人の内面をさらに理解し援助する義務がある。

「主体的・対話的で深い学び」という言葉が文部科学省より提唱され、保育の世界でも対話の重要性が求められている。保育者は「対話的」という観点からクラスでの「話し合い」を計画する際に正論を導かなくてはと、つい子供達同士の話し合いであるのにもかかわらず、答えにこだわり固定観念を押し付けがちである。その結果、子供達同士の話し合う場面を奪っていることがある。このように保育者主導で話し合いの環境を作ると、保育者が介在しないと自分達で話し合うことができないまま小学校に移行する可能性がある。子供達は大人が考えているよりも、はるかに柔軟である。相手との対話で内容がかみ合っていないとしても、その時間を共有し、イメージをお互い広げていき、自分とは違う他者の意見に気付き、自分の気持ちと折り合いをつけていく方法を自然と学んでいくのである。また、周囲の人達の話の仕方や内容を聞きながら、他者に伝わるように変えていくことを自ら学んでいくのである。保育者は子供達が自由に話し合いのできる環境を整え、子供達の世界を「見ていないようで実は見ている」と主体的に活動できるように援助

していく存在にならなければいけない。子供を中心とした環境の中で保育者がいかに一人一人と丁寧に関わり内面を理解していくかである。

今回の研究で自分の描いていた幼児理解とは異なり、子供達同士が予想以上に主体的な関わりを持っていく姿に気付いた。これはビデオに撮影した映像を逐語録化し、初めて気付いたことである。記録・分析し、同僚と対話することが質の高い保育に繋がると思われる。子供達の言葉の中に幼児理解を深めるプロセスがある。その観点から今後も研究を続け幼児理解を深めていきたい。

引用・参考文献

- (注1) 文部科学省「幼稚園教育要領」2017
- (注2) 青井倫子「仲間入り場面における幼児の集団調節-「みんないっしょに仲よく遊ぶ」という規範のもとで-」『子ども社会研究』創刊号14~26頁1995年
- (注3) 砂上史子・無藤隆「子どもの仲間関係と身体性-仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること-」『乳幼児教育学研究』第8号75~84頁1999年
- (注4) 白井純子・白井英俊・浜崎なおみ・菊池隆典・木畑典子・吉田嘉照・渡邊欣一「幼児の「聞き返し」-縦断的事例研究-」(『社会言語科学』第1巻第2号13~22頁1999年)
- (注5) 外山紀子「幼稚園の食事場面における子どもたちのやりとり-社会的意味の検討-」『教育心理学研究』48巻192~202頁2000年
- (注6) 『小坂美鶴「3歳児の仲間同士の会話特徴について:言語使用と発話機能の分析からの検討」聴能言語学研究』Vol. 18No. 3 154~162頁2001年
- (注7) 山本弥栄子「子ども同士の言語的コミュニケーションにおける-考察-会話の自然発生的過程の検討-」『大阪健康福祉短期大学紀要』第5号51~60頁2007年
- (注8) 淀川裕美「2-3歳児における言葉を用いた三者間対話の成立要因の検討-第三者の発話と被参加者の応答に着目して-」『乳幼児教育学研究』第18号63~74頁2009年
- (注9) 富岡麻由子「幼稚園の食事場面における幼児の会話の発達」『有明教育芸術短期大学紀要』第2号65~72頁2011年
- (注10) 砂上史子「幼稚園の葛藤場面における子どもの相互行為-子どもが他者と同じ発話をする事に注目して-」『子ども社会研究』17号23~36頁2011年
- (注11) 淀川裕美「2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化-確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して-」『保育学研究』第49巻第2号61~72頁2011年
- (注12) 淀川裕美「2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化-伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して-」『保育学研究』第51巻第1号36~49頁2013年
- (注13) 藤塚岳子「幼児期における会話の特徴と対人関係の発達過程-幼稚園年長児の自発的活動場面を通して-」『東海学園大学教育研究紀要』第1巻143~154頁2017年

(注14) 村田孝次著『幼稚園期の言語発達』培風館1974年226頁

(注15) 塩崎美穂著『子どもとつくる3歳児保育』加藤繁美監修 ひとなる書房2016年 16-22頁

(注16) 村田孝次著『幼児の言語教育』朝倉書店1973年21頁

謝辞

研究にあたり、幼稚園での日々の生活の記録を快く認めてくださった関係者の皆様に深く感謝いたします。